

「なま東大」で行われた 脱原発シンポジウムに参加して

田島直樹（市民科学研究室 低線量被曝研究会メンバー）

7 月末から夏バテに苦しんでいた私は、シンポジウム申し込みを指を啜って見過ごしていました。ようやく動けるようになった頃、思っても見ない参加の機会が与えられました。協賛団体である市民科学研に送られてきた参加葉書を、報告書を書くことを条件に分けて下さるというのです。

8 月 30 日東京大学駒場キャンパスの正門には、よく入学式で掲げられるような墨書のたて看板が掲げられていました。シンポジウム「福島原発で何が起きたのか—安全神話の崩壊」。そこだけ風景を切り抜けば、大学挙げて原発問題を考えていると誤解した人もいたでしょう。しかし、キャンパスの中はシンポジウム会場を除いて、原発の「げ」の字も放射能の「ほ」の字もいっさいなく、一市民でしかない私から見れば、学問の府が「虚脱空間」であるかのように映ったのでした。

正門から東に歩いて 5 分、会場は生協食堂の 2 階で、むかし駒場寮があったところです。主催者によれば、参加申込者が多いため当初の 250 人会場を 400 人会場に変更したそうです。私は開会時刻を 30 分早く勘違いしてたので、前のほう、関係者席のすぐ後ろに陣取ることができました。

首都圏での総合的なシンポジウムは、1 月の横浜以来でしたから、開会前の熱気には関心の高さが感じられました。予約者が満員になりました。

■共催団体 柏崎刈羽原発の閉鎖を訴える科学者・技術者の会
原子力資料所情報室
東京大学持続的開発研究センター
東京大学「人間の安全保障」プログラム
東京大学原発災害支援フォーラム
APAST(The Union for Alternative Pathways in Science & Technology)
高木仁三郎市民科学基金

■協賛団体 エントロピー学会
高木学校
市民科学研究室
環境エネルギー政策研究所
法政大学サステナビリティ研究教育機構
プラント技術者の会

■主催 「福島原発で何が起きたのか—安全神話の崩壊」シンポジウム実行委員会

★全体構成について

8月30日、31日と、懇親会を除いて全部をお聞きしました。私の質問も一通採用されました。シンポジウムの目的を私の受け取りで申しますと、

- 1) 福島で何が起こったのかの「おさらい」
- 2) 原発村支配と、私たち、日本、世界。
- 3) 私たちは何をなすべきか

ということになります、シンポジウムの主催者が「私たち」というとき、それは科学者・技術者、ということになります。

とりたてて「新しい事柄」を学ぼうというよりも、発災後1年半、私たちが見聞きし討論してきたことを、まとめて整理、発信しようということのようです。

※主催者の言葉による開会趣旨は、プログラム冊子を読んでください

http://ux.getuploader.com/komaba3/download/16/program_leaflet.pdf

閲覧キーワードは「komaba」です

2日間の全体構成には、実行委員会の事前討議が周到になされていたことを強く感じました。得てしてこのようなシンポジウムは、分野別や主張の違い別に、登壇者を「集めること」で終わってしまいがちですが、ここでは、主催者の志向性が確固としてある事によって、それが発言や討論の幅を制約するのではなく、逆に幅を広げていくという効果がみられました。

もちろん登壇者の立場はさまざまです。福島原発の事故調査については、政府、国会、民間、東電と4つの調査報告が出揃ったわけですが、このうち、東電を除いて3つの調査会関係者が集まっていたことには、私も驚きました。

もちろん主催者は、このうちの「国会事故調報告」を軸に討論することを明言しており、それぞれに同等の時間や人数を割り振るといった「形式平等主義」は取っていませんでした。しかし、民間事故調の北澤宏一氏や、原子力委員会の鈴木達治郎氏は、配当時間が少ないなかでも熱弁を振るってくれました。

あたかも「価値中立的」であるかのような「見栄えの運営」をしないからこそ、登壇者も視聴参加者も討論の軸がみえてきて、ハズレなかったのだとおもいます。

★内容の詳細

2 日間の日程は、実質 6 つのセッションで埋められていました。それぞれのセッションに、主報告者（40～50 分のスピーチ）1～3 名、コメンテーター（5～10 分）が 0～5 名おり、会場からの質問に答える時間も、セッションごとにおよそ 1 時間ほど保証されていました。その概容は以下のとおりです。

WEB サイトの広告や印刷表示よりも、現場のプログラムが充実していたので、それを改めて記します。

1 日目(30日)の登壇者

1、開会挨拶黒田光太郎（実行委員長、名城大学教授）

2、Session 1 福島第一原発で何が起こったかpart 1

コーディネーター：井野博満（東京大学名誉教授）

◆主報告：田中三彦（元原子炉圧力容器設計者・国会事故調委員）

「福島原発事故における地震による機器損傷の真相にせまる」

◆主報告：アーニー・ガンダーセン（フェアウェイズアソシエーツ社チーフエンジニア）

「福島原発事故から、すべての原子力関係者が学ばなければならないこと」

◆Q&A ディスカッション

3、Session 1 福島第一原発で何が起こったかpart 2

コーディネーター：山口幸夫（原子力資料情報室共同代表）

◆主報告：石橋克彦（神戸大学名誉教授、国会事故調委員）

「地震列島の原発の必然的帰結としての「福島原発震災」

◆コメンテーター：鈴木康弘（名古屋大学減災連携研究センター教授）

◆Q&A ディスカッション

4、Session 2 放射能汚染の現状

コーディネーター：細川弘明（京都精華大学教員）

◆主報告：今中哲二（京都大学原子炉実験所助教）

「福島原発事故による放射能放出と放射能汚染の実像」

◆コメンテーター：海老澤徹（元京都大学原子炉実験所助教授）

山田國廣（京都精華大学教員）

崎山比早子（高木学校、国会事故調委員）

◆Q&A ディスカッション

◆コメンテーター：北澤宏一（独）科学技術振興機構顧問、民間事故調会長

アーニー・ガンダーセン（フェアウェイズアソシエーツ社チーフエンジニア）

第二日目(31日)の登壇者

5、Session 3 日本の原子力政策と安全神話の形成

コーディネーター：船橋晴俊（法政大学教授）

◆主報告：吉岡斉（九州大学副学長、政府事故調委員）

「福島原発事故の「政策失敗病」としての諸側面」

◆主報告：フィリップ・ワイト（アデレード大学アジア研究センター）

◆コメンテーター：鈴木達治郎（原子力委員会委員長代理）

海渡雄一（日本弁護士連合会）

田中三彦（国会事故調黒川会長代読）

金平茂紀（TBS 報道局）

◆Q&A ディスカッション

6、Session 4 核をめぐる科学技術のあり方

コーディネーター：丸山真人（東京大学教授）

◆主報告：高橋哲哉（東京大学総合文化研究所教授）

「犠牲のシステムー責任をめぐるー考察」

◆主報告：ミランダ・シュラズ（ベルリン自由大学教授、ドイツ「安全なエネルギー供給に関する倫理委員会」委員）

「エネルギーの倫理と科学者・産業界・政治家および社会の責任ードイツ「安全なエネルギー供給のための倫理委員会」の経験から」

◆主報告：池内了（総合研究大学院大学教授・理事）

「原発の半倫理性と科学者の社会的責任」

◆Q&A ディスカッション

7、Session 5 まとめ あらためて科学者・技術者の立場から

◆実行委員長：黒田光太郎、

各セッションコーディネーター：井野博満、山口幸夫、細川弘明、船橋晴俊、丸山真人

◆コメンテーター：関谷雄一（東大「人間の安全保障プログラム」、吉野太郎（「科学・社「科学・社会・人間」）、今中哲二（京都大学原子炉実験所）、武本和幸（原発反対刈羽村を守る会）、伴英幸（原子力資料情報室共同代表）、後藤政志（元東芝・原子炉格納容器設計者、NPO APAST 理事長）

※主報告者の事前梗概はプログラムにあります。閲覧キーワードは「komaba」です。

http://ux.getuploader.com/komaba3/download/16/program_leaflet.pdf

※追加資料は、閲覧キーワードは「komaba」です。

<http://ux.getuploader.com/komaba3/download/15/additional.pdf>

★主報告についての感想

田中三彦氏は、4つの事故調のうち国会事故調だけがとりあげた、「福島第一原発は地震では破損しなかったのか？」を詳しく語りました。圧巻は、津波到達時刻の2分間の誤魔化し、圧力逃がし弁の振動音についてのミステリーです。

ガンダーセン氏は、マーク1型沸騰水炉の根本欠陥を指摘し、事故の工学的本質を語りました。わたしが一番印象に残ったのは「メルトダウン事故は福島を経験したことによって7年に1回起こることがわかった」というくだりです。

石橋克彦氏は、彼がフクイチ以前から唱えてきた「原発震災」「地震つき原発」を、シンポジウムがビデオ配信される世界の人々に向けて、改めて語ってくれました。基本講義ともいべきものです。地震列島に原発があること自体が罪なのです。

今中哲二氏は、放射能の放出という観点からフクイチ4炉の事故現象を再確認しました。そして現在の福島での汚染の状況をチェルノブイリと比較しました。2日目の発言とあわせると、今中氏の主張は、「子どもたちの初期被曝」と「非がん疾患」を憂慮監視すること、最大限の安全原則に基づき、健康診断を行き届けさせねばならない、ということです。

吉岡齊氏は「原子力の社会史」の著者として、「成人病」を「生活習慣病」と言い換えて厚生政策の失敗を糊塗した故事になぞらえて、福島原発事故を、「政策失敗病」の蓄積による必然的結果だと喝破しました。話しっぷりは、ご自分がたった一人の脱原発派「政府事故調委員」であったことからくる、諧謔に満ちたものでした。

フィリップ・ワイト氏は、ウラン採鉱国でもあり先住民被曝問題の国でもあるオーストラリアから日本の運動を分析しました。放射能の健康問題で多くの日本人が声を上げるようになったが、世界的にみれば「核拡散」の問題は大きい。人類に「核」は必要かという問題を、もっとストレートに取り上げて、国際共鳴を図って欲しいということでした。

高橋哲哉さんは、ドイツで戦争の4つの罪を説いたヤスパースを牽いて、原発の安全神話にだまされようやく目覚めた私たち日本民衆の罪を分析しました。見過ごして惨禍を招いてしまった「政治的責任」はあっても「道義的責任」は民衆にはない、ということでした。「政治的責任」は「脱原発」を実現することで十分に償えるそうです。教会牧師さんの説教のようでした。

ミランダ・シュラーズさんは、ドイツの脱原発政策の大きな原動力となった「倫理委員会」の委員で、ドイツの市民運動から説き起こし、環境問題での経験から「科学・技術的問題」と「政策決定の問題」とを、切り分けて考える習慣を為政者層も身に付けてきた

ことを指摘しました。もう一つは、自然エネルギーは緑の党と社会民主党の連立以来政策化されたり頓挫したり、繰り返しの蓄積です。ドイツはフランスの原発電力を買っていると非難する人がいますが、フランスがドイツの風力電力を買っていることも事実だそうです。

池内了さんは、弱い立場の人間にそのマイナス面を押し付ける原発の反倫理性を語ったうえで、「科学」自体にも反倫理性が内包しているということを指摘しました。そして科学や科学者が本源的な反倫理性を克服回避するために何をしたらいいか、いくつかの提案をしました。私は、「自主・民主・公開」の3原則では不十分となった今日の、科学者・技術者の倫理的課題と受け取りました。市民科学研でも一度、池内さんに講演をお願いしたらいかがでしょうか？

以上が主報告者についての感想ですが、コメンテーターからも短いスピーチの中で、重要な論点が提出されました。

- 鈴木康弘＝活断層・破碎帯問題
- 海老澤徹＝情報公開されない原子炉地下の汚染水
- 山田國廣＝高圧洗浄と表土剥離の無為無策
- 崎山比早子＝国会事故調委員をやって知った「放射線リスクが正当に評価されない」土壤
- 北澤宏一＝日本はフェイルセーフにできてない原発を使いはじめた
- 鈴木達治郎＝原子力委員会は安全委員会と分離した頃から「安全」を議論しなかったこと、業界との事前根回し会議のことなど、いろいろ反省中、
- 海渡雄一＝脱原発弁護団と原発訴訟について
- 田中三彦＝国会事故調からの7つの提言
- 金平茂紀＝私が知ってる7つのマスコミ内部事実、マスコミは安全神話の主役である

ここには記しませんが、各セッションでのQ&A 応答は、個別の問題点をいっそう鮮やかに描出するものでした。

★駒場シンポからの発展

シンポジウム以降の展開は、セッション 5 「まとめ」で語られています。

今回のシンポジウムでは、共通理解の竹串として「国会事故調報告書」が縦に貫いていました。分かりやすいシンポジウムとなった大きな要因かと思われます。「国会事故調報告書」はWEB サイトにアップされています。

<http://naiic.go.jp>

なお 9 月 2 日の日弁連シンポで教えてもらったのですが、国会図書館のデータサービス部課が、4 つの事故報告書を対比したレポートを公開しているそうです。国会議員向けのアンチョコですが、私たちにも便利かもしれません。

http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_3526040_po_0756.pdf?contentNo=1

今回の駒場シンポジウムに、なにか物足りなさがあるとすれば、それは、「放射線・放射能による健康被害」の問題と、現地福島の方々が置かれている、生々しい「被曝管理行政」の問題です。これらを分かりやすい討論構成をもって議論していくことは、おそらく方法論的にも至難の技でしょう。しかし来年春ごろまでには、何らかの形で実現して欲しいものです。

シンポジウムの最後にAPASTの後藤さんから、今回の成果を発展させる情報発信センターとして、「(仮称) 原発問題を考える科学者・技術者の会」と「(仮称) 福島原発事故の原因調査委員会」の提案がありました。

主催者のお骨折りに感謝して、参加報告とします。

2012年9月4日記

(事務局注)

田島様からは、ご自身でシンポジウムの様子を録音された音声ファイルのご提供と、それに対するリンクを、原稿中に記載していただいていたおりましたが、市民研では主催者の許可がない限り、個別の音声ファイルを公開しないこととしておりますので、関連する記述を事務局において削除させていただきました。